

初代教会の多くは、パウロによってその基礎が築かれました。それらのほとんどは小アジア(現在のトルコ)、そしてギリシャに点在していました。この事実から、パウロの宣教の対象が、異邦人、つまりギリシャ人を初めとした非ユダヤ人であったことが分かります。

これらの初代教会の人々は熱心で、その信仰生活は熱気に満ちていました。しかし、問題も抱えていました。当時の状況をパウロの書簡に従って探っていくと、人間同士の確執、神学的理解の相違、性格の違いから来る対立等、問題は絶えなかった様子が分かります。

その良い例がアンティオキアの教会です。そこでは、先輩のユダヤ人のクリスチャンは、後輩の異邦人のクリスチャンと一緒に食事をしてはいけないという決まりができていたのです。

ガラテアの教会の問題はもっと深刻でした。異邦人がクリスチャンになるためには、その条件として割礼等の宗教的戒律を遵守し、ユダヤ人に禁じているものは異邦人も絶対口にしてはならないとされてたのです。

つまり、アンティオキアの教会もガラテアの教会も、ユダヤ人のクリスチャンは異邦人のクリスチャンよりランクが上だと主張したのです。

パウロはこのような状況を目の当たりにして、大いに憤慨し、また悲しみました。イエスに従うと決意した人々がこのような優越意識にかられていることは全くのナンセンスだったのです。彼は記しています。「イエスにおいて、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も奴隷主もなく、男も女もない。すべてはキリストの下において平等である。」

しかし、パウロは間違った考えの人々に対して、「私を見よ。私のように正しい人間になれ」とは絶対に言いませんでした。何故なら、彼自身自分の批判は時に毒を含んでいたり、皮肉な語調を帯びたり、厳しさよりも陰しさを含んだものであったりすることを深く自覚していたからです。

彼はローマ人への手紙で次のように告白しています。「わたしは自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることを実行するからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。善を行おうという意志はあるのに、それを実行できないのです。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。」

この言葉は絶望的に聞こえます。一条の光もないように聞こえます。しかし、この後に続く言葉を読んでみましょう。「わたしは知っています。いかなる罪も、死さえも、主イエス・キリストによって示された神の愛から私たちを引き離すことはできないのです。」

パウロは知っていました。神は彼が良い人間だから愛してくださるのではないことを。そうではなく、神は彼の惨めさ、いたらなさを彼以上に知っておられるのに、にも関わらず彼を応援してくださっているということ。この確信こそ、キリストがもたらす給うキリストの平和であるということ。

ここに彼が間違った考えの人々に、「わたしを見よ。わたしの正しさに学べ」と言わなかった理由があります。パウロは自分の善に希望を託したのではなく、あくまで神の赦しの恵みに希望を託したのです。

神の赦しの恵み、それは空気に例えることができます。空気は見ることはできません。空気の存在を意識することはほとんどありません。しかし吸わなくては死んでしまいます。私たちは呼吸することで空気の有り難さを実感できるのです。

神の赦しの恵みにも同じことが言えます。私たちが認識しようと、しまいと、神の赦しの恵みは私たちに絶えず注がれているのです。私たちががらうじて人間らしく生きることができるのは、私たちが善だからではなく、神が善だからです。神の赦しの恵み故です。この告白こそ、キリスト教信仰の中核です。

以上のことから、私たちはイエスが日米合同教会に連なる私たちに今何を語っておられるのかを知ることができます。それは少なくとも二つあります。

一つ、それは、現在という時を出来る限り人間らしく、深く、生き生きと生きなさい、というメッセージであるに違いありません。優しさの眼差しをもって他者と接しなさい。祈りなさい。神を仰ぎ見て生きなさい。諦めずに、一生懸命努めなさい。そうイエスは私たちに語りかけておられるに違いありません。

イエスが私たちに語っておられるものの二つ目、それは、「失敗しても大丈夫。私がいるから大丈夫」、ということであるに違いありません。ころんだ時には、私が引き起こしてあげる。足下があぶない時には私が支えて上げる。常にやり直す機会を与えてあげる。何回も、何回も。だから心配せずに、正々堂々と生きなさい。後は私が引き受ける。これであるに違いありません。

それが証拠に、イエスは彼を取り囲む群衆に言われました。「重荷を負っているすべての人よ。私のものに来なさい。休ませてあげる、そのあなたを。」

この言葉に生涯忠実であったパウロは記しています。「私たちは生きるにしても主のために生き、死ぬにしても主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のもので。」

この信仰を人生の基盤に据えて生きる時、回りの状況がどうあろうとも、魂の安らぎと平安を経験することができるのではないのでしょうか。正々堂々と人間らしく生きることができるのではないのでしょうか。これこそがキリストが私たち一人一人に与え給う平和、すなわちキリストの平和であります。